

高校生を対象にした避妊教育

—ライフスキル学習を基盤に置いた避妊教育の実践—

木村 正治・松尾 洋・久佐賀真理

Education for Contraception to High School Students

—Practice of Education for Contraception by a Life Skill Teaching Method—

Masaharu KIMURA, Hiroshi MATSUO and Mari KUSAGA

(Received September 1, 1997)

We made inquiries about contraception to high school students, analyzed the results, and gave them two lessons (50 min×2) about contraception.

As a result, we came to the following conclusions :

- 1, Enabling factors which are composed of the life skills and reinforcing factors which are composed of the environments factors were low compared with predisposing factors which are composed of knowledge and attitudes. Therefore, it is necessary to develop the education for contraception to select predisposing factors and to add enabling and reinforcing factors.
- 2, The education for contraception is important because we were able to enhance self-esteem and build life skills of students.
- 3, A major contemporary issue in education for contraception was to deal with life skill teaching in all other subjects including health education.

Key words : contraception, precede model, skills, self-esteem

I 緒 言

十代の未婚女性の妊娠, その結果としての人工妊娠中絶の件数は年々増加傾向を示している¹⁾. その原因として, 近年の性の解放にともなう性に関する情報の氾濫や若者の婚前性交に対する意識の軟化, 初交年齢の低年齢化²⁾, 避妊の知識のあいまいさや避妊の知識を行動に移すための具体的なスキルの不足などが考えられる. 加えて, 最近では「援助交際」という売買春を肯定化するキーワードが社会問題にもなっており, 若者の性交に対するモラルの傾向³⁾を見ると, 今後十代の未婚女性の妊娠・中絶の増加傾向はますます高くなると予測される.

このような社会状況の中では, これまで行われてきた知識の伝達に重きを置いた, 教育効果の上がらない避妊教育を行動科学の理論から見直し, 現在の社会的背景を考慮に入れた若者の行動変容を促す避妊教育の実践が不可欠であると考えられる.

そこで本研究では, 健康教育プログラムの開発に多大な影響を与えている Green L.W.のプリシードモデル⁴⁾に沿った質問紙を開発し, 避妊行動に関する先行, 促進, 強化因子を調査し, その結果を分析して授業を構成し, これらを総合して高校生に対する避妊教育の課題について考察を加え報告する.

II 対象及び方法

1. 避妊行動に関する質問紙調査

調査対象：男子 94 名，女子 67 名，合計 161 名（高校 1～3 年生）

調査方法：無記名による質問紙法

調査内容：①避妊および人工妊娠中絶に関する基本的な知識

②避妊および人工妊娠中絶に対する態度，価値観

③避妊に関する具体的なスキル，自己主張コミュニケーションスキル

④家族、友人および学校などの強化因子の状況

⑤ Harter の「認知されたコンピテンス尺度」⁵⁾を用いたセルフエスティームの測定

2. 避妊教育の授業実践

授業対象：熊本県立K高校 2 年生（男子 51 名，女子 68 名）

方 法：各クラスに一週間ごとに授業を 2 コマ実施した（50 分×2）。

授業目標：質問紙調査の結果をもとに以下の授業目標を設定した。

①避妊に関する正しい知識を身につける。

②避妊に関するスキルを身につける。

③性交，避妊および人工妊娠中絶に対する態度、価値観を育成する。

授業概要：表 1 に毎時のねらい，学習内容，学習活動及び教材について示した。

3. 授業後の質問紙調査

調査対象：授業対象に同じ

調査方法：質問紙法

調査内容：授業内容および避妊についての自由記載による感想

表 1 授業概要

毎時の目標	学習内容	学習活動及び教材
1 時限 避妊に関する正しい知識を身につけ，それを生かす具体的なスキルを身につける。	①生殖を目的としない性交（ふれあいの性）について学ぶ。 ②性交に対する価値観の多様性について学ぶ。 ③避妊の正しい方法について理解する。 ④コンドームの使用スキルを身につける。	①ビデオ「性交・避妊」（一橋出版製作） ②婚前性交の是非をテーマにしたブレーンストーミング ③ビデオ「性交・避妊」，避妊成功率のグラフ ④コンドームの付け方のデモンストラーション
2 時限 避妊に対する態度，価値観を育成し，避妊行動を促進するスキルを身につける。	①望まない妊娠についてのケーススタディ ②性行動に関する具体的対処スキルを身につける。	①「私と彼とそのあいだ」(筑摩書房)より一部抜粋 ②婚前性交についてのロールプレイ

III 結 果

1. 避妊行動に関する質問紙調査

解答者は男子 94 名，女子 67 名，合計 161 名で結果は表 2 に示した。

(1) 避妊行動に関する先行因子について

避妊に関する基本的な知識や態度，価値観からなる 5 つの質問項目について調査した。避妊とはどういうことであるかという問いに対して男子 91.5%，女子 94.0%が正しい理解を示していた。しかし，単独で用いる避妊法として危険とされている膣外射精及びリズム法（基礎体温法，オギノ式）について，正しく理解している者は男子 50.0%，女子 52.2%にとどまった。コンドームの正しい使用方法については，男子 70.7%，女子 67.2%が正しく理解していたが，装着時の注意点について誤って理解していた者が男子 20.2%，女子 11.9%に見られた。

表 3-1 に，避妊に対する態度，価値観についての調査の結果を示した。男女間の避妊に対する意識の差を見るために，カイ二乗検定を行った。

表 3-2 に，人工妊娠中絶に対する見解についての調査結果を示した。同様に男女間の意識差を見るために，カイ二乗検定を行った。人工妊娠中絶を容認している者は男子 68.1%，女子 49.8%で，男女間の意識に有意な差が見られた。（ $P < 0.05$ ）

(2) 避妊行動に関する促進因子について

避妊行動を促進するスキルについては，①避妊に関するコミュニケーションスキル②情報収集スキル③性的接触に対する自己主張コミュニケーションスキルおよび④拒否スキル⑤避妊具の入手スキルおよび⑥使用スキルに関して，各々 3 肢択一で質問した。結果は図 1-1，図 1-2，図 1-3，図 1-4，図 1-5 および図 1-6 に示した。

表 3-1 避妊に対する態度，価値観

	男子	女子
簡単には妊娠しないので，避妊はあまりしなくていい。	7 人 (7.4%)	3 人 (4.5%)
避妊に慣れていると思われたくないので，避妊はあまりしなくていい。	4 人 (4.3%)	0 人 (0.0%)
面倒くさいので，避妊はあまりしなくていい。	5 人 (5.3%)	1 人 (1.5%)
妊娠を望まない性交のときには，必ず避妊すべきである。	47 人 (50.0%)	35 人 (52.2%)
避妊について恋人同士で話し合えるようになるべきである。	31 人 (33.0%)	25 人 (37.3%)
		(χ^2 -test, N.S)

表 3-2 人工妊娠中絶に対する見解

	男子	女子
医学的理由以外は，絶対に避けるべき	16 人 (17.0%)	16 人 (23.9%)
生命尊重の立場から，生むべき	13 人 (13.8%)	18 人 (26.9%)
望まない妊娠ならば仕方がない	26 人 (27.7%)	11 人 (16.4%)
避妊に失敗した場合は仕方がない	10 人 (10.6%)	6 人 (9.0%)
女性の意志・選択権として行われていい	28 人 (29.8%)	15 人 (22.4%)
		(χ^2 -test, $P < 0.05$)

表 2 調査結果

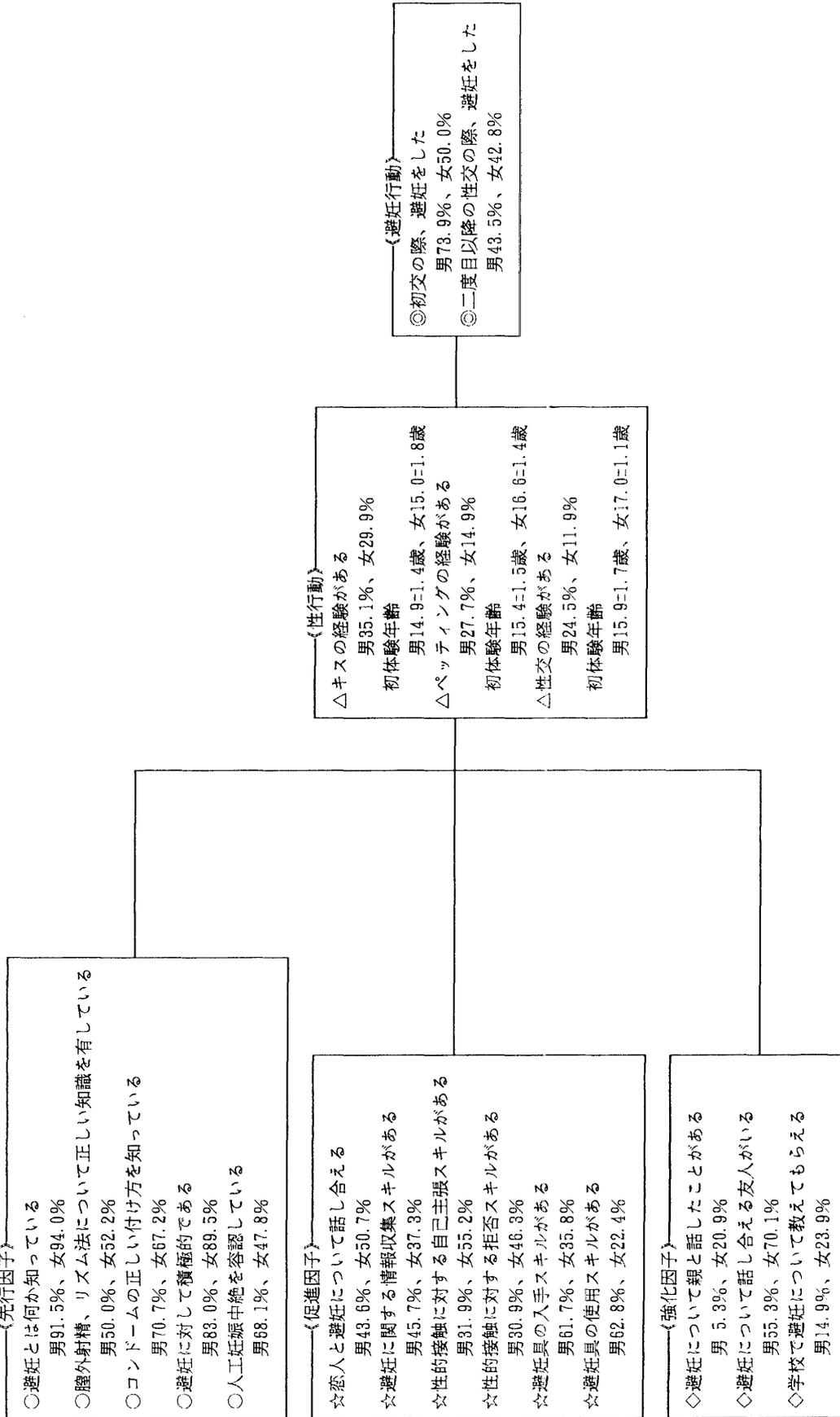


図 1-1 避妊に関するコミュニケーションスキル

①「私は、恋人と避妊について話し合うことができる。」という問いに対して、「できないと思う」と回答していた者(男子9.6%, 女子1.5%)と比較すると、「どちらともいえない」と回答していた者が男女ともに多かった。(男子45.7%, 女子47.8%)

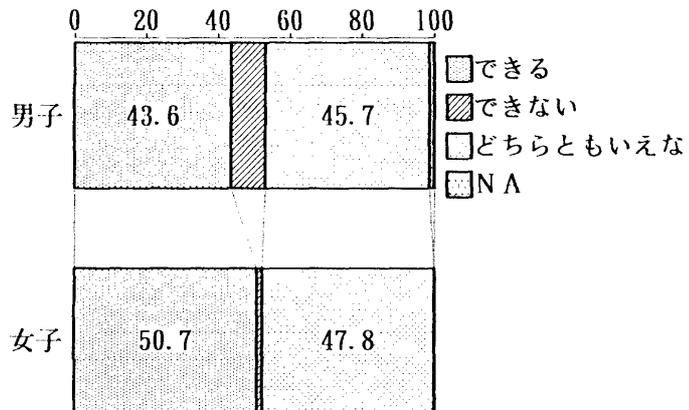
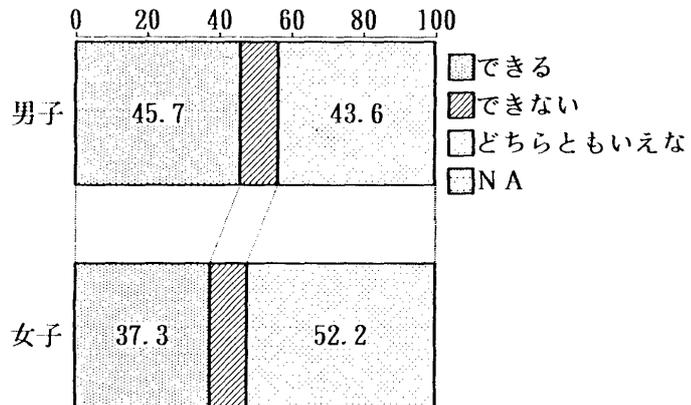


図 1-2 情報収集スキル

②「私は、避妊のために必要な情報を得ることができる。」という問いに対しては、男女ともに約1割の者が、「できないと思う」と回答していた。同様に「どちらともいえない」と回答していた者が多かった。(男子43.6%, 女子52.2%)



③「私は、自分の意思に反した性的接触を避けることができる。」という問いに対して、「できると思う」と回答していた者が、男子に比べて女子が多く、5割を越えていた。(男子31.9%, 女子55.2%)同様に「どちらともいえない」と回答していた者が多かった。(男子50.0%, 女子34.3%)

図 1-3 性的接触に対する自己主張コミュニケーションスキル

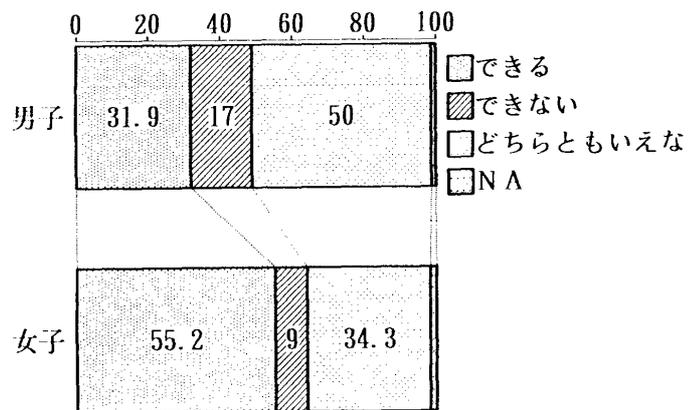


図 1-4 性的接触に対する拒否スキル

④「私は、強引に性的接触を迫られても、うまく断ることができると思う。」という問いに対して、同様に「できると思う」と回答していた者が、男女で比較すると女子が多かった。(男子 30.9%, 女子 46.3%)「どちらともいえない」と回答していた者はほぼ同数であった。(男子 51.1%, 女子 47.8%)

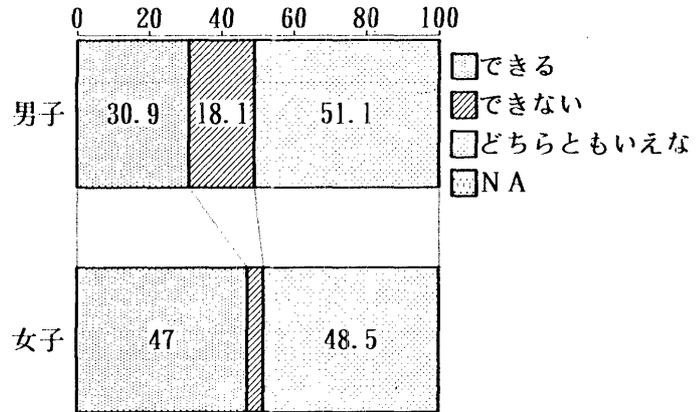


図 1-5 避妊具の入手スキル

⑤「私は、望まない妊娠を避けるために避妊具を手に入れることができる。」という問いに対して、「できると思う」と回答していた者が、女子に比べて男子が多かった。(男子 61.7%, 女子 35.8%)「できないと思う」と回答していた女子生徒は 28.4%にのぼった。

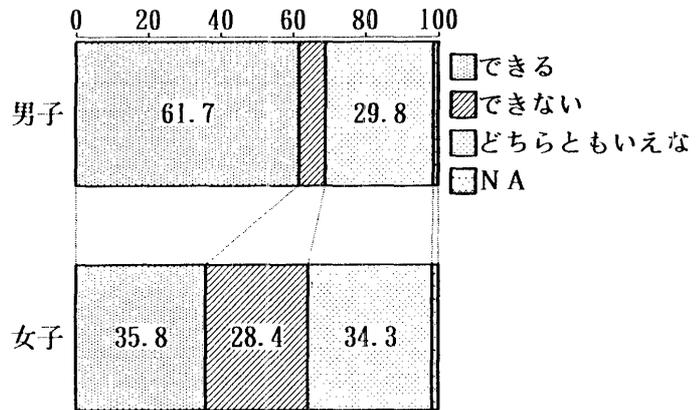
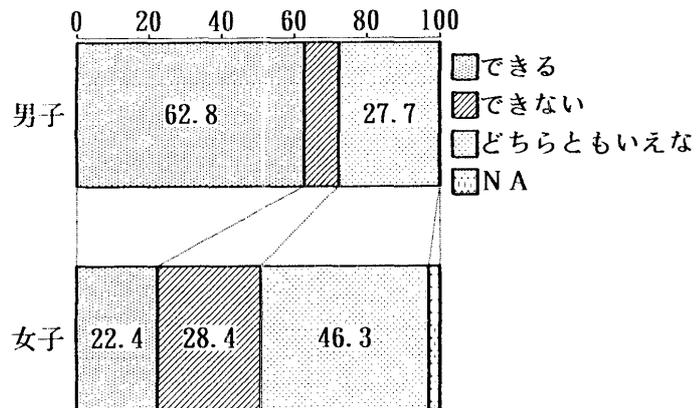


図 1-6 避妊具の使用スキル

⑥「私は、望まない妊娠を避けるために避妊具を正しく使うことができる。」という問いに対して、同様に、「できると思う」と回答していた者が、男女で比較すると男子が多かった。(男子 62.8%, 女子 22.4%)「できないと思う」と回答していた者は、男子 9.6%, 女子 28.4%だった。



以上の6項目において、「できると思う」と回答した者の割合が50%以上を示した項目は、男子では避妊具の入手スキルおよび使用スキルの2項目で、女子では避妊に関するコミュニケーションスキルおよび性的接触に対する自己主張コミュニケーションスキルの2項目であった。

(3) 避妊行動に関する強化因子について

避妊行動を強化する因子として、環境要因である⑦家庭⑧友人および⑨学校に関して、各々3肢択一で質問した。結果は図1-7、図1-8に示した。

図1-7 避妊に関する家庭でのコミュニケーション

⑦「私は、避妊について親と話したことがある。」という問いに対しては、「話したことがない」と回答していた者が男女ともに多かった。(男子78.7%, 女子59.7%)

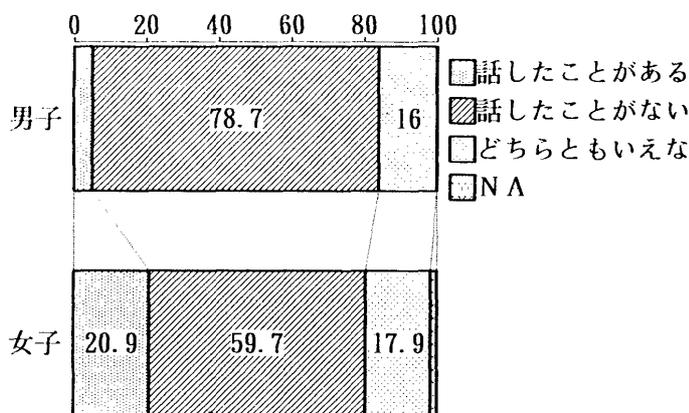
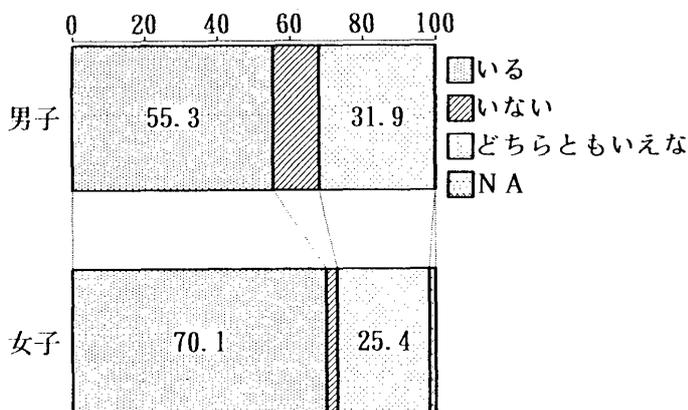


図1-8 避妊について話し合える友人の有無

⑧「私は、避妊について話し合える友人がいる。」という問いに対して、「いる」と回答していた者が男女ともに多かった。(男子55.3%, 女子70.1%)



⑨「学校で、避妊について必要なことを教えてくれる。」と回答していた者は、男子14.9%, 女子23.9%にとどまった。

(4) 性行動の現状

キスの経験がある者は男子33名(35.1%), 女子20名(29.9%)で、キスの初体験年齢の平均は男子14.9±1.4歳, 女子15.0±1.8歳だった。ペッティングの経験がある者は男子26名(27.7%), 女子10名(14.9%)で、ペッティングの初体験年齢の平均は男子15.4±1.5歳, 女子16.6±1.4歳であった。性交の経験がある者は男子23名(24.5%), 女子8名(11.9%)で、性交の初体験年齢の平均は男子15.9±1.7歳, 女子17.0±1.1歳で、男子のほうが女子よりも性交経験者の割合が高かった。

表 4-1 初交の際の避妊の実行状況

	男子	女子
避妊をした	17名	4名
避妊しなかった	5名	4名
覚えていない	1名	0名
不明	5名	7名

表 4-2 二度目以降の性交の際の避妊の実行状況

	男子	女子
いつも避妊をした	10名	3名
避妊をしたときとしないときがあった	10名	2名
いつも避妊しなかった	1名	2名
覚えていない	2名	0名
不明	5名	8名

表 5 避妊行動に関するスキルとセルフエスティーム

		男子	女子
①避妊に関するコミュニケーション	できる	67.5± 9.85	62.8±10.58
	できない	56.9±10.24	55.0
(P<0.05)			
②情報収集	できる	67.2±12.33	62.4±10.97
	できない	60.4±11.65	56.1± 6.07
③性的接触に対する自己主張	できる	65.6±12.32	61.5±11.28
	できない	63.1±10.85	59.5± 7.58
④性的接触に対する拒否	できる	66.5±12.14	60.5±11.44
	できない	60.8±11.42	62.0± 4.36
⑤避妊具の入手	できる	65.4±11.00	60.9±12.32
	できない	58.5±14.55	55.9± 6.44
⑥避妊具の使用	できる	65.0±11.71	65.0±11.51
	できない	55.4±12.51	53.8± 6.98
(P<0.01)			

た。

表 4-1 に、初めての性交のときの避妊の実行状況についての調査結果を示した。「避妊をしなかった」と回答した者は男子 5 名、女子 4 名と女子では性交経験者の半数を占めた。「避妊をした」と回答した者（男子 17 名、女子 4 名）を対象に、そのときの避妊法の種類について質問したところ、コンドームを使用した者が 20 名で膈外射精が 1 名（男子生徒）だった。

表 4-2 に、二度目以降の性交のときの避妊の実行状況についての調査結果を示した。「避妊したときとしないときがあった」と回答した者は男子 10 名、女子 2 名で、「いつも避妊しなかった」と回答した者（男子 1 名、女子 2 名）と合わせると男女ともに性交経験者の約半数が避妊に無頓着なことが分かった。

(5) セルフエスティームの測定結果について

Harter の「認知されたコンピテンス尺度」を用いて生徒のセルフエスティームの測定を行った。「Cognitive」「Physical」「Social」「General」の各 4 因子 7 項目（1 項目 1～4 点）における得点の総和を、セルフエスティームの得点とした。平均得点は男子 63.7±11.3 点、女子 60.0±10.6 点であった。

表 5 に、(2)の避妊行動を促進するスキルとセルフエスティームの得点の関係についての調査結果を示した。

女子生徒の性的接触に対する拒否スキルを除いた全ての項目において、「できないと思う」と回答した者よりも、「できると思う」と回答した者の方がセルフエスティームが高かった。

スキルとセルフエスティームの関係の有意差を見るためにt検定を行ったところ、男子生徒の避妊に関するコミュニケーションスキル ($P < 0.05$) および女子生徒の避妊具の使用スキル ($P < 0.01$) の2項目について、有意差が見られた。

その他の項目については有意差は見られなかった。

2. 避妊教育の授業実践

[1 時限]

性交に対する価値観の多様性についてふれさせるために、婚前性交の是非をテーマにしたブレインストーミングを行った。授業に際し、自分の意見をはっきり言うことに慣れていなかったためにスムーズに活動が進まないグループがあった。授業後のアンケートでは、婚前性交の是非をテーマにしたブレインストーミングを経験して「自分と考え方の違う人がたくさんいるなあと思った。」「他の人がどんなふう考えているかが分かってよかった。」などの感想があげられていた。

避妊法について、授業前のアンケートでコンドームが最も避妊成功率が高いと回答していた生徒が男女ともに9割以上いたため、ここでは各避妊法の避妊成功率のグラフとコンドームを正しく使用するための5つの条件を提示した。加えて、避妊経験者の避妊方法ではコンドームを使った者がほとんどで、我が国の避妊の現状⁹⁾を併せて考え、ここでは避妊法の中でもコンドームに焦点をあて、コンドームの正しい付け方ならびにコンドームの付け方のデモンストレーションを行った。授業後のアンケートでは、「自分で付け方を練習してみようと思った。」「しっかり付け方を覚えておきたいと思った。」「女だから関係ないとかではなくて、付け方をしっかり覚えておこうと思った。」などの感想があげられていた。

[2 時限]

避妊に対する態度、価値観を育成するために望まない妊娠についてのケーススタディを行った。ケーススタディ終了後に感想を聞いたところ、「避妊のことをしっかり考えて性交しなくてはならないと思いました。」「避妊をするならきちんとしなくてはならないと思いました。」「お互いにしっかり避妊について話し合ってから性交しなくてはならないと思いました。」という意見が返ってきた。授業後のアンケートでは、「妊娠を望んでいないときはしっかりと避妊をしなければならないと思った。」と回答した者が男子73.9%、女子85.3%に見られた。

性行動に関する具体的なスキルを習得させるために、性交についてのロールプレイを行った。ここでは、生徒の性交経験の実態を踏まえて、性交を経験していない男女2人の会話の中で、男性が女性に性交を迫るという場面を設定した。授業後のアンケートでは、「自分の意思をはっきり相手に伝えなければならないと思った。」「自分のことを相手に伝える練習ができてよかった。」などの感想があげられていた。

IV 考 察

現在、避妊教育は高等学校から保健科教育で「家族計画」として取り扱われている⁷⁾⁸⁾。その内容を見てみると、主な避妊法の一覧と簡単な留意点が記載されているだけで、具体的な使用法の

記載はされておらず、ましてや避妊の知識を実行に移すための具体的なスキルおよび避妊行動を強化する環境要因へのアプローチの観点などは全く欠落している。今回の調査でも、先行因子と比較すると促進因子や強化因子が低いことが明らかになった。

プリシードモデルの提唱者である Green L.W.は「意識、関心、知識などの先行因子を高めるために情報をもつぱら提供し、促進因子や強化因子を考慮しない健康教育は、資源をもっていたり、行動の結果としてのフィードバックが容易に得られるようなごく一部の人々には有効かもしれないが大多数の人々の行動に影響を与えることはないであろう。」と述べている⁹⁾。避妊教育のような行動の変容を究極的な目標とする健康教育では、先行因子を高めるための情報を精選し、促進因子である健康行動に関する具体的なスキルを習得させるとともに、強化因子へのアプローチを含めたヘルスプロモーションの理念¹⁰⁾に基づいた地域や家庭と連携した教育プログラムの開発が必須であると考えられる。

今回の調査では、避妊に対して積極的な態度を示していた者が男子 83.0%、女子 89.5%と多かったが、実際に望ましい避妊行動が取れた者が男女ともに性交経験者の約半数に止まった。避妊の必要性を理解していても、望ましい避妊行動が取れていないという背景には、避妊に対する意識の低さや自己中心性、非科学的な根拠による行動や無自覚的傾向などが考えられる¹¹⁾が、その根底にはセルフエスティームおよびライフスキルの欠如があると考えられる。

人間は自分のイメージに沿って行動するものであり¹²⁾、早期の性交や若年妊娠、喫煙および薬物乱用などの問題行動の背後には、共通してライフスキルの欠如の問題がある¹³⁾ことが報告されている。加えて、アメリカの健康教育プログラム KYB ではセルフエスティームがすべてのライフスキルの、ひいては豊かな自己実現の根底をなすものであると考えられている¹⁴⁾。今回の調査でもセルフエスティームが高い者ほど具体的なスキルが身につけていることが明らかになった。したがって、避妊教育においてもセルフエスティームおよびライフスキルの形成を教育内容に盛り込むことが早急な課題であると考えられる。

しかし、学校5日制の導入による教育内容の精選により、従来の教科「保健」だけで上述した教育内容をカバーすることは到底不可能であり、他の教科や特別活動などの教育課程ととどのようクロス¹⁵⁾させていくかが今後の課題であるといえる。

ライフスキル教育は学習者主体の参加型の授業が中心となり¹⁶⁾、生徒は社会免疫理論ならびに社会的学習理論¹⁷⁾を理論的根拠とするロールプレイやブレインストーミングなどの小集団活動を通して具体的なスキルを習得していく。今回の授業で、生徒がロールプレイやブレインストーミングなどの小集団活動に慣れておらず、その中でこのような教育手法を用いることに困難を感じた。包括的な避妊教育プログラムの開発と同様に、他の教科の中でも生徒に小集団活動に慣れさせて効果的なライフスキル教育を行っていく必要がある。

避妊教育を行う際には「寝た子を起こすな」という意見も少なくないが、現在の青少年がおかれている社会状況を考えて、「寝た子を上手に起こそう」という立場に立つことがより教育的であるといえよう。

V 結 語

高校生を対象に避妊行動に関する質問紙調査を行い、調査結果の分析に基づいた避妊教育の授業実践を通して、避妊教育の課題について考察し、以下の結論を得た。

1. 知識や態度などの先行因子に比べて、促進因子である具体的なスキルや強化因子である環境要因の得点が低かった。このことから先行因子を高めるための情報を精選し、促進因子や強化因子へのアプローチを含めた、地域や家庭と連携した避妊教育プログラムの開発の必要性が指摘された。
2. 避妊教育にセルフエスティームおよびライフスキル学習を含むことが不可欠である。
3. 他の教科や特別活動といかに教育内容をクロスしていくかが避妊教育の今後の課題である。

引用・参考文献

- 1) 林謙治：十代の妊娠，自由企画出版，1989.
- 2) 東京都幼稚園・小・中・高等学校性教育研究会連絡協議会：児童生徒の性，学校図書，108，1988.
- 3) 上掲2，100.
- 4) 健康教育ビジュアル実践講座刊行会：第1巻 これからの生涯健康教育—新しい視点に立った保健室経営—，ニチブン，64，1996.
- 5) 桜井茂男：認知されたコンピテンス測定尺度（日本語版）の作成，教育心理学研究，第31号，第3号，60-64，1983.
- 6) 上掲2，110-112.
- 7) 松田岩男他：現代高校保健体育改訂版，大修館書店，1992.
- 8) 文部省発表高等学校学習指導要領 全文の改訂の要点，明治図書，1989.
- 9) 川端徹朗：Japan Know Your Body (JKYB) の主唱者として，学校保健研究，Vol137，86，1995.
- 10) 上掲4，84-87.
- 11) 木村正治・久佐賀真理：専門学校生の性の実態と性教育の実践，熊本大学教育学部紀要第45号，自然科学，63-77.
- 12) Branden, N., 手塚郁恵訳：自信を育てる心理学，春秋社，1992.
- 13) JKYB 研究会編：学校健康教育とライフスキル—Know Your Body プログラム日本版の開発—，亀田ブックサービス，1994.
- 14) JKYB 研究会編：第5回JKYB健康教育ワークショップ報告書，JKYB研究会，1997.
- 15) 野上智行編：総合的学習への提言—教科をクロスする授業 第1巻「クロスカリキュラム」理論と方法，明治図書，1996.
- 16) 野上智行編：総合的学習への提言—教科をクロスする授業 第4巻「健康教育とライフスキル学習」理論と方法，明治図書，1996.
- 17) 川端徹朗：喫煙・飲酒・薬物乱用防止教育で重要なこと—行動科学の理論に基づいた健康教育プログラムの実践—，体育科教育8月号，大修館書店，29-32，1997.